

令和 5 年 5 月 28 日現在

機関番号：32686

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K17227

研究課題名(和文)性暴力被害による絆の断絶，修復しうる支援構想についての研究

研究課題名(英文)The Damage on Sexual Assault Victim's Social Relationships and the Support System

研究代表者

横山 麻衣(YOKOYAMA, Mai)

立教大学・社会学部・助教

研究者番号：60756089

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は2つあり、1つは性暴力被害がもたらす社会関係への影響を把握することであり、もう1つは被害者支援に携わる組織活動の継続可能性を明らかにすることである。1つ目については、性暴力被害を経験した者のうち、社会関係に影響があったと回答した者は3割程度であることがわかった。また、それら影響は、必ずしも抑うつ精神症状を伴っているとは限らなかった。2つ目の研究では、被害者支援に携わる非営利組織の半数以上が、5年に満たない継続可能性しかないことが明らかになった。質的比較分析により、継続可能性はスタッフの業種多様性や財源多様性によってもたらされていることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従前の性暴力研究では、医療化や心理学化の傾向が顕著である。本研究の知見は、支援体制を構築する上で、被害者に対する偏見やステレオタイプなどの社会的要因への働きかけもまた同様に重要であることを、根拠を持ってしめすことができたと思われる。また、非営利組織は被害者によって優れた主体であると評価されているが、本研究における知見は、非営利組織を欠いては機能しない日本の支援体制を強化していく必要性和緊急性を浮かび上がらせたと思われる。

研究成果の概要(英文)：There are two primary aims of this study: 1. To investigate the effect on victims' social relationships after sexual assault 2. To ascertain the likelihood of the survival of nonprofit organizations involved in support programs for sexual assault victims. The result of research 1 showed that roughly 30% of survivors had experienced negative effect on their social relationships. Interestingly, the damage on their social relationships hadn't necessarily occurred with psychological symptoms of depression. The result of research 2 revealed that just over half of organizations had the likelihood of their survivals would be 5 years or less. The QCA (cs-QCA) showed that the likelihood of the survival was caused by the diversity of staff professions and the variety of income resource.

研究分野：ジェンダー研究

キーワード：ジェンダーバイストバイオレンス 社会関係 強かん神話 支援体制

## 1. 研究開始当初の背景

性暴力がもたらす影響についての先行研究では、医療化や心理学化のもとで、トラウマ理論を枠組みとした把握が主要なアプローチとなっている。こうした研究潮流に対して、英語圏のいくつかの先行研究では、法制度や被害者にとって利用可能な地域資源のあり方といった社会的環境への着目を排除しているとして批判がなされている。また、被害者による著書や支援についての事例報告を見る限り、被害者が受ける影響は、被害そのもののみならず、その後の他者や社会との相互行為を通じて生じる事象、あるいはその過程そのものも看過することはできないと言える。例えば、強かん神話と言われる、被害者非難などの偏見やステレオタイプは広く共有されていると言われており、それが性暴力の暗数増加のみならず、被害者のメンタルヘルスの悪化をもたらさうと考えられる。しかしながら、性暴力の被害者が受ける社会関係上の影響については、ほとんど研究蓄積がないと言ってよい。

また、日本では、性暴力の被害者支援は非営利組織によるボランティア活動を前提としており、第1種福祉施設をはじめとする公的施設も非営利組織活動に依存しているといつて過言でない。そして、被害者による支援の評価に関する調査では、非営利組織や男女共同参画センターの相談員への評価が高く、警察や生活保護の窓口などは評価が低いことが明らかにされている。ここからは、被害者が被害後に他者との相互行為を通じて受ける影響は、相手方が公的機関である場合にはネガティブになる確率が高く、相手方が非営利組織（指定管理者である非営利組織含）のスタッフや非正規公務員である場合にはポジティブになる確率が高いことを示唆している。しかし、省庁による実態調査では、非営利組織活動は、人・物・金の不足が著しく、世代交代が難しく、高齢化傾向にあることが明らかにされている。また、非正規公務員の待遇や労働環境は悪化傾向にある。それゆえ、性暴力被害者支援に携わる非営利組織活動の継続可能性等を明らかにし、継続可能性に影響を与える要因について検証することは、学問的のみならず社会的にも意義深いと思われる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は2つあり、1つは性暴力がもたらす社会関係への影響を把握することであり、もう1つは被害者支援に携わる非営利組織活動の継続可能性を明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

本研究は量的および質的調査を併用した。

(1) 性暴力がもたらす社会関係への影響の把握について。

①オンラインモニター会社に登録する女性のうち、なんらかの性暴力の被害経験がある者を対象に、その後の社会関係への影響等について問うた。

②大学生を対象に、強かん神話への支持度や性暴力被害経験、社会関係の変化の有無等について問うた。

(2) 支援に携わる非営利組織活動の継続可能性について。

①内閣府のデータベース等を用いて選出し、調査票郵送調査を実施した。

②その後、同意が得られた組織を対象に、活動の継続可能性やそれを左右しうる要因について聞き取り調査を行った。

#### 4. 研究成果

(1) ①国内外の先行研究における知見と一致して、なんらかの性暴力被害を経験した者の割合は半数を超えていた。そのうち、社会関係に影響があったと回答した者は3割程度であることがわかった。また、それら影響は、必ずしも抑うつ精神症状を伴っているとは限らなかった。

②強かん神話への支持度は、先行研究における知見と一致して、女性よりも男性の方が支持する傾向が確認された。また、被害後の他者との関係への影響については、女性では強かん神話への支持度にかかわらず変化が見られ難かったものの、男性では、強かん神話への支持度が高い場合に、他者とのかかわりを避ける傾向が確認された。ここから示唆されるのは、被害経験や強かん神話の支持が、あるべき男性性への観念と結びついており、被害によって「男性性」が損なわれたと想定される場合に、強かん神話はいくらかポジティブな認知をもたらす信念として機能しうることが示唆された。

従前の性暴力研究では、医療化や心理学化の傾向が顕著である。本研究の知見は、被害者の心身への「治療」のみならず、被害者に対する偏見やステレオタイプなどの社会的要因への働きかけもまた同様に重要であることを、根拠を持ってしめすことができたと思われる。

(2) ①回答した組織の半数以上が、継続可能性への見通しは5年に満たないと答えた。そして、継続可能性を結果、組織規模、財源多様性、業種多様性、活動年数を条件とし、cs-QCAを用いてブール最小化を行った結果、財源多様性が高く、業種多様性が高い条件組合せが、継続可能性の高さを生じさせる最も被覆度の高い項であることが明らかとなった。この部分集合は、組織の正味財産蓄積によるリスクマネジメントのみならず、利害関係者との関係構築の実現契機が高い、いわば「堅実・関係構築型」という特徴を表していると考えられる。他方で、継続可能性の低さに関しては、スタッフ総数が多く、財源多様性が高く、業種多様性が低い条件組合せが、最も被覆度および整合性が高い項であった。この部分集合は例えば、財産を人件費ではなく被害者のためにあてがっているために、スタッフの多くがボランティアで、専業主婦といった特定の職業の者しか活動に携わることができない、いわば「奉仕型」の特徴を表していると推察しうる。

②聞き取り調査の結果、財源多様性の高さを実現する要因は、必ずしも組織自身によって特定されておらず、継続的な活動に伴い、実績が積み重なることで生じうるということであった。また、業種多様性については、対外的に正統性を示すために重要だと認識する組織もある一方で、報酬を伴わない活動であることから、結果的に特定の業種に偏ってしまう傾向にある組織も存在した。

非営利組織は被害者によって優れた主体であると評価されているが、本研究における知見は、非営利組織を欠いては機能しない日本の支援体制を強化していく必要と緊急性を浮かび上がらせたと思われる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

|                                                     |                      |
|-----------------------------------------------------|----------------------|
| 1. 著者名<br>横山麻衣                                      | 4. 巻<br>517-1        |
| 2. 論文標題<br>「強かん神話支持と性別ごとの社会的文脈 性的に不快な経験後のプロセスに着目して」 | 5. 発行年<br>2021年      |
| 3. 雑誌名<br>人文学報                                      | 6. 最初と最後の頁<br>107-26 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                       | 査読の有無<br>無           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難              | 国際共著<br>-            |

|                                         |                 |
|-----------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>横山麻衣                          | 4. 巻<br>6686    |
| 2. 論文標題<br>書評「非正規公務員のリアル 欺瞞の会計年度任用職員制度」 | 5. 発行年<br>2021年 |
| 3. 雑誌名<br>都政新報                          | 6. 最初と最後の頁<br>8 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし           | 査読の有無<br>無      |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難  | 国際共著<br>-       |

|                                           |                     |
|-------------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名<br>横山麻衣                            | 4. 巻<br>65          |
| 2. 論文標題<br>「性暴力被害者支援を担う非営利組織活動の継続可能性について」 | 5. 発行年<br>2023年     |
| 3. 雑誌名<br>応用社会学研究                         | 6. 最初と最後の頁<br>35-48 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし             | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難    | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

|                                               |
|-----------------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>横山麻衣                               |
| 2. 発表標題<br>非営利組織活動の継続可能性 社会学領域の組織理論に基づく調査結果から |
| 3. 学会等名<br>数理社会学会                             |
| 4. 発表年<br>2022年                               |

|                                                        |
|--------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>横山麻衣                                        |
| 2. 発表標題<br>大学生の強かん神話支持度についての調査結果 「公正な世界信念」による説明の検討に向けて |
| 3. 学会等名<br>日本女性学会                                      |
| 4. 発表年<br>2019年                                        |

|                                                                |
|----------------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>横山麻衣                                                |
| 2. 発表標題<br>対人援助をささえる 民間シェルター，男女共同参画センター，性暴力被害救援ワンストップ支援センターの場合 |
| 3. 学会等名<br>第90回日本社会学会大会テーマセッション「社会学を基盤にした新しい専門職の可能性」           |
| 4. 発表年<br>2017年                                                |

|                                             |
|---------------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>横山麻衣                             |
| 2. 発表標題<br>非営利組織の継続可能性 社会学領域の組織理論に基づく調査結果から |
| 3. 学会等名<br>福祉社会学会                           |
| 4. 発表年<br>2023年                             |

|                                           |
|-------------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>横山麻衣                           |
| 2. 発表標題<br>公設民営の男女共同参画センターの相談事業に関する全国調査結果 |
| 3. 学会等名<br>社会政策学会                         |
| 4. 発表年<br>2023年                           |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|  | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|